

公刊戦史によれば「菊兵团」三万四千四百四十四人、戦没者二万三千九十四人、生還者一万一千五十一人でした。

南方の思い出

長崎県 末吉安男

私は大正十一（一九二二）年四月十日、長崎県南高来郡西有家町見岳の農家、末吉家に、男四人、女三人の長男として生を享けました。

昭和十八（一九四三）年四月十日、戦争が激しくなる中で、福岡市の旧福岡城跡にあります歩兵第一一三連隊の補充隊に召集され入隊致しました。当時は南方作戦の激化の中でありましたために一期の検閲は三カ月期間が普通でしたが、私達は二カ月に短縮されました。それだけに訓練も厳しく、毎日二列に向かい合っつての対抗ビンタで叩き合いました。入隊する時から覚悟して来まし

が、軍隊生活の厳格さは予想以上でした。叩かれ、男涙を流し、二カ月はあつと云う間に過ぎました。

本来、長崎県人は大村市にありますが歩兵第四十六連隊に入隊するのが普通でしたが、私共七人は南方作戦要員として、福岡市にありますが歩兵第一一三連隊に入隊し、二カ月後には南方に派遣されることになりました。ニューギニア島が危うくなりましたので、多分インパール作戦に参加するのではないかとの噂がもつぱらでした。

八月十七日、博多港に各地より約千二百人位が集結し、軍用船に乗船させられ出港しました。船中はいっぱいで棚を作つて二段式の応急ベッドに寝ることにしてありましたが、足を延ばしますと足と足が重なり中々眠ることができません。加えて海が荒れるのでごろごろと転んで「あ痛い、あ痛い」と叫びながら目をさます。腹は空腹でひもじくてたまりませんが、船酔いで食べたものは吐き出す。まるで生地獄のような苦しみでした。

特に台湾馬港に四日間停泊し、食糧の補給をし、バシー海峡にさしかかりますと、海の荒れは激しく、敵艦船の見張りと、敵飛行機の襲撃の監視役を命ぜられました。船酔いで満足に監視役を務めることのできる者はおらず大変でした。

幸い敵潜水艦の襲撃も、敵機の空襲も受けることなく九月十九日、仏印のサイゴン港に無事到着致しましたので「さあ、上陸か」と喜んでおりました所、食糧補給のための入港と聴いてがっかりしました。

博多港出港以来一カ月余、土を踏んでいないだけに皆上陸を希望しておりました。三日停泊してシンガポール港に向かいました。

九月二十三日、シンガポール港に入港、やっと上陸命令が下りました。さすが英軍の東洋基地でありましたシンガポールだけに、立派な港にきれいな街並に感心しました。日本軍と英軍が交戦した街だけに戦争の傷跡が生々しく残っております

た。それでも街中は復興に努力する人々の姿を所々に見掛けました。私達は港から歩いてブキテマの競馬場跡に野営することになりました。コンクリートの上に毛布を敷き寝ましたが、背中が痛くて眠れず二カ月間苦労しました。

ちょうどその頃タイ国とビルマを繋ぐ泰緬鉄道が完成しておりましたので、私達は薪を燃やして走る泰緬鉄道に乗車しビルマに向かいました。ビルマに着いてその悲惨さに驚きました。物資は不足し、インパール作戦から撤退する疲れ切った日本軍の兵隊さん達の姿は惨めでした。ビルマのベープで烈第一二四部隊が各県の混成で編成されました。

私は下士官候補の試験を受験しましたが、残念ながら結果は不合格でした。幸い島原市出身の河田軍曹の口添えで、下士官候補生に採用され、シンガポールの学校に入学することになりました。下士官養成の学校も人手不足と、激戦の最中のために、十二カ月を十カ月で切り上げられ、急ぎ各

部隊に帰ることになりました。

昭和十九年十二月五日、ビルマの部隊に帰り、第二大隊本部付を命ぜられ、馬の手入れと蹄鉄の仕事をすることになりました。現地の馬はチャン馬と云いまして、日本馬より背丈が低く、走る速さも遅い馬でしたが、日本馬は暑さに耐えることができませんで、どうしてもチャン馬を使用せねばなりませんでした。

昭和二十年の正月は、ビルマのイラワジ川の流域にありますサガセンで迎えました。戦争はいよいよ激しくなり昭和十八年十月、日本軍の飛行機と英軍の飛行機との空中戦が行われ、日本軍機が敵機を撃墜したのを最後に日本軍の飛行機は一機も見ることがありませんでした。

制空権を奪われた日本軍の上空には、インドの空軍基地から飛び立つイギリスの飛行機ばかりで、空襲と低空よりの機銃掃射で、日本軍の陣地は次々と破壊されました。ジャングルがないので広々とした大平原では逃げ込む場所がなく、防空

壕に逃げ込むのがやっとの毎日でした。

夜昼なく低空で飛来し、機銃掃射でバリバリ撃つて来るので、昼間は動きがとれなくなりました。敵機飛来の度毎に近所に住む現地人の悲鳴の聲、逃げ惑う現地人、あざけ笑うように椰子の木すれすれに低空で飛ぶ敵さんの搭乗員の顔まで見える位のやり放題に、まさに生き地獄の様相でした。軍備不足の日本軍の憐れさをしみじみと感じました。

佐賀出身の西村獣医中尉と共に連れて来たチャン馬六頭も、一頭また一頭と次々と倒れ、死亡してしまいました。例えば馬であっても可愛さは同じ、吾が肉親を失ったような淋しさを感じました。折も折、わが町西有家町の小川さんより教えられたと、母の弟であります近藤さんが会いに来てくださいました。激戦地で親戚の近藤さんに会うことができるとは、夢にも思えない嬉しさでした。

近藤さんは満州の関東軍から転属転属で三度南方に派遣されたと、思い出の数々を二時間近く話して下さって、本当に楽しい一刻でした。私は中学校に近い近藤さんの家から三年間中学校に通学しました。お仕事が鍛冶屋さんでしたから、知らず知らずの内に関心を持ち、軍隊に入隊し踏鉄士を志望したのも近藤さんの影響でした。その近藤さんも二カ月後戦死されたことを知り、あれが最後の面会だったのかと思いますと、思わず涙が溢れ出しました。

私と西村獣医中尉と勤務する場所の近くに、娘と二人で住むビルマ人の母子がおりました。五十年配の女性でしたが、私達に食事を作って来て食べさせる、洗濯物があればと種々親切にしてくれました。二カ月後別れる時は金までくれて別れを惜しんでくれました。国境を越えた親切に感動しました。

昭和二十年三月、私も獣医勤務伍長に任官しま

した。後方に勤務する私達に聴こえてくる便りは、インパール作戦から悲惨な敗退をする日本軍の悲しい報告でした。水無し、食糧なし、兵器なし、さしもの無敵を誇る九州の精鋭部隊もばたばたと倒れ、無惨な死体の山に手の尽くしようがないとのことでした。

後方戦線にいる私達さえ、食べる物は現地人から調達して来た玄米を一升瓶に入れ、棒で突いて、それを竹のバラに移し糠を払い、土鍋で蒸し焼きして手で掴み食べる。水に塩を入れ胡椒をまぜたスープを吸うのが精いっぱい食事でした。水は溜り、その水を布で漉し、二時間位澄まして飲む状態でしたから最前線での飲料水の確保は困難を極めたことは領けます。

履く靴もなく戦死した戦友の靴を頂戴するか、椰子の葉を縫よって草履を作って履くしかない、履物を確保できない実態でした。シンガポールでは給料も月十五円位貰っていましたが、ビルマでは一年間一銭の給料も貰えませんでした。その上

ビルマの言葉がわからないため大変苦勞しました。便所があった。

さらに困ったのは大便の始末でした。便所がありませんので、現地人に合わせねばなりません。現地人は大便は日光のある時間に用を足すのは罰が当たるとの風習があり、陽が沈むのを待つて野原で用をすますことにしておりますので、私達も太陽の沈むのを待つて野原で用をすませました。後始末は野犬が来てペロペロなめて整理してくれました。現地人はパンツをはいておりませんので、男女共立ったまま用をすます姿があちこちで見受けました。

私の知った戦友六人が、現地人の所に食糧の調達に行きましたが、ついに帰って来ませんでした。後で判明しましたことは、現地人に毒殺されたとのことでした。

戦況が不利になって来ますと、現地人の日本兵に対する目も厳しくなって来ました。病気になる

ても薬はないので行き倒れる現地人や日本兵も多くなりました。

昭和二十年五月、私はマラリアの熱病に罹りましたので、タイ国のシャコンバトンにありませ野戦病院に入院することになりました。入院のために移送中、イギリス人の避暑地でありましたシャコン高原を通ることになりました。松が生い茂る立派な避暑地でした。下ればタイ国になります。シャコンバトンにはイギリス人の捕虜を収容する捕虜収容所がありました。その隣に野戦病院がありましたので入院治療を受けることになりました。

入院している者は四百二十人位でしたが、薬の不足している中での治療ですから満足な治療ができる筈がありません。それでも軍医さんや看護婦さん、衛生兵の皆さんは一生懸命努力して下さいました。

隣の捕虜収容所にはイギリス兵が主で、アメリカ

カ兵も少人数收容されていると聞きました。管理は日本軍がしておりましたが、朝鮮人を使用してゐることでした。この朝鮮人から後日こき使われようとは夢にも思っておりませんでした。一日何回か起こるマラリア特有の高熱のため震えが来てベッドから離れることができませんでした。

八月に入って病院の外と、隣の收容所が騒がしくなりましたので「何事か！」と衛生兵に聴くと、「終戦だ！ 敗戦だ！」と言葉少なく叫ぶので戦争が終つたことを始めて知りました。即時退院だと云われましたが、まだ完全に治っておりませんので、居座ることにしました。

私達病人も快方に向かった者は、洗濯物の使役に狩り立てられました。当初は食事量減量されて腹が減って苦しみましたが、兵隊さん達が口惜しさをこらえて一生懸命働いてくれるので、次第に食事も増加されて来ました。

終戦により生命をなくする心配と恐ろしさはな

くなりましたが、捕虜という汚名を受けながら、皆辛抱して働きました。日本人と違ってイギリス人は気が長く「はい、はい」と使命されたことを素直に体を動かしておれば、鷹揚に見てくれました。

捕虜生活九カ月、昭和二十一年五月中旬、日本への帰国が命令されました。「さあ日本へ帰れるぞ」と喜んで帰国準備を始めましたら、仲間からアマーバー赤痢にかかった者が出たため、一番船に乗ることができず、これには大村部隊の大部分が乗船し、サイゴン港を出発しました。

五月十八日、やっと出港が許可され、二番船で四〇〇人乗船し、サイゴン港を出港しました。船中は混成部隊で賑やかでしたが、敗戦と云う心の痛手と、戦友を亡くした淋しき、身も心も疲れ切つた者達ばかりで、日本への帰国の喜びの中にも淋しさをかくすことができませんでした。

バシー海峡は南方へ行く時と同様荒れました

が、敵機、敵船の見張りはすることもなく、船は一路日本へ向かって走り続けました。

波に揺れながら数々の思い出が走馬灯のように駆け巡りました。福岡連隊に勇んで入隊しましたが、毎日気合を入れられ叩かれ涙を流したことが、どこかの戦場へ連れて行かれるのかと、不安の中でシンガポールからタイ国へ、そしてビルマへ、インパール戦場の悲惨さ、隣町の北有馬町出身児玉曹長と南有馬町出身の満田勲さんの戦死。履く靴がなく戦死された人の靴を頂戴し履いたこと。機銃掃射を受け念仏を唱えながら椰子の木の幹をぐるぐる廻り、生きて帰ることができるのか：死んでも靖国神社へ祀って下さるから心配するなど、自分に云い聴かせながら防空壕の中に飛び込んだ毎日。歯みがき粉を薬と騙して現地人の傷に塗ってやったこと。親切にしてくれたビルマの女性の名前と住所を聴いて来なかった残念さ等を思い出し、戦争の悲惨さを二度と繰り返してはならないと心に誓いました。

昭和二十一年六月一日、私達は久里浜に上陸しました。兵站の宿舎でしたが、寝るにも寝られず毛布探しに行つてやっと探して寝ていると「誰だ毛布を持って来たのは」と、叱られ取り上げられてしまいました。日本本土も品物不足だなあと身にしみて感じました。

六月十三日、兵役を解除され、ボロボロの服を着たまま混雑する列車に押し合いで乗車しました。なつかしい日本本土も戦後の苦しみ生き延びようとなさる人々の姿に頭が下がりました。

六月十五日午後二時頃。やっと西有家町の吾が家に辿り着きました。田植えのためか家には誰もおりませんでした。無事帰って来たことを神仏に感謝の報告を済ませ体を横たえておりますと、家族の者が田植えをすませ帰って来ました。私の姿を見て「よく帰って来たなあ」と涙を流し喜んでくれました。

三日目には諫早市にあります厚生省の出先世話課を訪ね、一年間給料を貰っていないことを報告

し、当時の日本円で五百三十円を受領しました。

「これで戦争は終わったぞ、明日からは祖国再建にがんばるぞ、戦死した戦友の分までがんばるぞ」と誓いました。

今でもインパール作戦で戦死した人々の姿が目から離れません。

戦人^{いくさひと} 尊き生命 投げ捨て

祖国を護る 心美わし

ビルマ西部戦線死闘記

愛媛県 福田 秀吉

私は農家の五男二女の長男として、大正十（一九二一）年七月十五日に生まれました。長ずるにつれ、世の中は軍国主義一辺倒となり、「日本男児と生まれなば一度は軍隊生活を経験せねば一人前の男になれん」と、「なるなら一刻も早く軍人にならなきゃ」と役場に出掛け、徴兵検査は昭和

十六（一九四一）年のところを現役志願を願い出して、昭和十四年末の徴兵検査を受けました。

結果は見事に甲種合格となりました。私が兵隊に入っても男の手は四人もおり、留守宅には何も心配はありませんでした。

志願に当たって兵科の志望は馬の扱いに馴れていたのに加え、輜重隊の下士官の乗馬姿と軍刀を佩刀できるのが憧れの的だったので輜重隊を希望しました。

昭和十五年四月十日、善通寺の輜重兵第十一連隊第二中隊に入隊しました。中隊長は宮地信敏中尉、第二内務班班長川添武伍長でした。それから一年六カ月の間は厳しい訓練に明け暮れ、たくましい帝国軍人に生長しました。

昭和十六年九月、第五十五師団の歩兵第百十二連隊に転属となり、丸亀に移動し、歩兵隊付の行李隊になりました。

昭和十六年十月、坂出港から輸送船団で出港、